

算
根
集

算
根
集

(非 売 品)

ノートルダム 清心女子大学 古典叢書第二回配本「草根集」

昭和四十二年五月二十日

刊行責任者

シスター・セント・ジョン

翻刻責任者

白 井 た つ 子

発 行 所

岡山市伊福町二丁目一六の九

ノートルダム 清心女子大学 国文学研究室古典叢書刊行会

(振替、岡山・七二三)
電話五二一一五五

印 刷 所

姫路市南町一八 岸本印刷株式会社

凡 例

一、本書は、「草根集」関係の次の五種類の本文を翻刻したものである。

- | | | | | |
|-----|--------------------|-----------|----------------|----|
| (一) | ノートルダム清心女子大学蔵黒川文庫本 | 草根集 | 春・夏・秋
冬・恋・雑 | 七冊 |
| (二) | 正宗文庫蔵本（弥富氏旧蔵本） | 草根集 | 恋 | 一卷 |
| (三) | 正宗文庫蔵本 | 草根集 | 残葉 | 一冊 |
| (四) | 正宗文庫蔵本 | 北野法榮詠百首和歌 | | 一冊 |

一、翻刻にあたっては、原本の姿をできるだけ忠実に伝えるよう努めた。したがって、仮名遣の誤りや宛字などもみだりに訂正せず、すべて原本のままとした。ミセケチ、補入の類も原本の通りに示し、本文とは異筆で補入が行なわれている場合には、当該の箇所の下に（異筆）と注記することによって、その旨を明示しておいた。

印刷の都合上、仮名は、本書に移す際、現行字体に改めたが、漢字については次の方針をとった。

- 1 現行漢字と一致するもの、および、これに近いものには、現行漢字を用いた。
- 2 異体字はなるべく残すようにした。

例 卅(世) 𦵏(秋) 峯(峰) 墅(野) 淵(淵) 𣎵(松) 𣏟(梅) 𣏟(桜) 𣏟(萩)

良(貌) 集(魚) 鷺(燕) 取(最) 弥(彌) 凉(涼)

3 12 以外には旧字体、正体を用い、新旧二体が併用されている場合や、異体字が併用

されている場合には、底本に従って使いわけを原則とした。

ただし、底本における使いわけが判然としない恋(戀)、関(關)、祓(祓)などの文字は恋、関、祓に統一した。磯・磯、斗・計も磯、斗に統一した。

一、漢字で読みにくいものには()を用いて、平仮名でルビを施しておいた。

一、原本に誤脱があると認められる場合には、その箇所(右傍に「」と記した)。

一、歌頭の数字は、翻刻者が、便宜上、各本ごとに付した通し番号である。ただし、(一)の歌頭下段の数字は、底本に存するもので、それらの歌が、もと、日次本の何巻から抜き出されたのかを物語っている。

一、ある歌の一部もしくは全部が欠けていて、底本でその箇所が空白となっている場合には、

で示した。

一、(一)については、島原公民館蔵松平文庫本との比較をも行なった。対校資料として松平文庫本をえらんだのは、それが同系統の諸本の中で、もっとも(一)に近く、かつ善本と目されるものだからである。解説で詳しく述べるつもりだが、松平文庫本と黒川文庫本とは、実に多く

の共通点を有し、筆蹟から、用字、仮名遣の癖まで酷似しているので、その関係の近さを具さに識り、かつ、これらの共通祖本のおもかげをうかがうよすがともなるうかと考えて、異同は、細大洩らさず指摘することにした。仮名づかいや漢字の相違も、煩瑣をいとわず明示した。とにかく、二本の間に何らかの差違が見られる場合には、黒川文庫本文の当該の箇所の右傍に*印を付し、下欄に歌番号を注してその異同を掲げておくようにしたのである。

下欄の書式は―の上が黒川文庫本、下が松平文庫本の本文であることを示している。

例、二六二九

かりねーかねて
(黒川本) (松平本)

草根集 一 目 次

春

.....

1

夏

.....

149

草 根 集 (春)

歳中立春

一七 冬に先あひやとりしてくる春の霞や年の中へたつらん
 二 さゝ浪や津による舟も大伴の三の春きてかすむ冬哉
 三 冬に立春の子の日の松き^るも千世の年木のためしにや摘
 四 かすめ空年立くれば年くるゝいさよひの月や春の曙

立 春

五 月も日も半をめくる久堅の山のみなみに春や立らむ
 六 年のをのなかき春日の初とやいつる光ものとけかるらむ
 七 雪のうちに出る日影のさしなから今日を春とやのとけかるらし*
 八 かきりなくむかふる年を送ても行末遠き春や立らん
 九 高砂の梢の風に聞ゆらし春たつこゑの住よしの松
 一〇 いくををか又ふる郷となしはてゝ今日は都に春のきぬらん
 一一 今朝みれば舌は久堅もあらかねも春をおさむる四方の色哉
 一二 立かへる春の日吉の影たかき山はふしのね雪もけなくに
 一三 年こゆる空にかそへてしらすともかすむや春のたつ日なるらん*
 一四 若菜摘けふを待てや荒玉の春さへ壁へに立わたるらん
 一五 八幡山はるさへ三の衣手にうつる日影やかすみ初らむ

三 き^るも千世の年木のためしにや摘

七 らし^るらん

一三 なる^一成

一六

一六 久かた―久堅

一七

雪のうちに春たつことや久かたの神代ふりにし天のかく山
はつ雪の初市いそく民の袖今日や霞に立ましらん

一八

四

一八 かな―哉

一九

春きぬと豊芦原に立帰り年なみこゆる四方の海かな
今朝みれは雲そ色なる天の原雪け霞て春や立らん

二〇

末とをき舌にうちはへて立こむる霞や春のすかたなるらん
空にしる春の霞のはた物をたつやおとめのあまの羽衣

二一

くりかへし限しられぬ年のをのなかきをけふの春日にそみる
万代をめぐりくれとも老せぬや春をつれたるけふのわか年

二二

かすむ也けふもろこしに日本をふりさけみてや春をしるらん
来る春は神代や契り天地の中の衣をたつ霞かな

二三

よもの海春や立らし老のなみ心のときき御代の年哉
明わたる神のいかきに年越て大宮人や春をしるらん

二四

うちなひき年と春とのけふしはや友なひきたる御代そのときき
嶺こゆる霞やひなの長路より春たちのほるしるしなるらん

二五

明わたるたかまか原そ霞くるあまくたりてや春のたつらん
をしなへて霞にけりな海山もみなわか時と春やたつらん

二六

跡たるゝ此国なれはをしなへて今日神風に春や立らむ
今朝のまにあつき氷をみなとくや春たつ風もはけしかるらん

二七

天の原明る岩戸の関越ていまた旅なる春やきぬらん

二八

天の原明る岩戸の関越ていまた旅なる春やきぬらん

二九

天の原明る岩戸の関越ていまた旅なる春やきぬらん

三〇

天の原明る岩戸の関越ていまた旅なる春やきぬらん

三一

天の原明る岩戸の関越ていまた旅なる春やきぬらん

三二

天の原明る岩戸の関越ていまた旅なる春やきぬらん

三三

天の原明る岩戸の関越ていまた旅なる春やきぬらん

三四

天の原明る岩戸の関越ていまた旅なる春やきぬらん

- 三五 春にたつ浪のかさしのわたつみも今朝は霞をかけやそふらん
 三六 大伴の三津の白浪春や立かすみをかけて遠き濱奈*
 三七 今朝霞山もそこらのわたつ海に浪をはふかすたてる春かな*
 三八 此地に神のきにける初とや立かへる年も天くたるらむ
 三九 朝かすみしき津の浪に立春を松は昨日の住よしの霜
 四〇 つらなれる山の霞やくる年に春立ならふさころもの袖
 四一 奈たかき雪のしらゆふかすむ也神の御山に春やたつらん
 四二 天地のひらけし花の都より春立初ていく昔なるらん
 四三 む月てふ昔は人ことに新しきけふの衣に春やたつらん
 四四 霞とく都はたつみのとけきや此神風に春のたつらむ
 四五 あらかねの土はしまらぬ青海の浪の色にや春の立けん
 四六 七十に四方の山風かすむ也老もろともに春やたつらむ*
 四七 やはらくる光のかけに春や立ちりもかすまぬ神の国かな
 四八 雲風を空になひけて四方に立春や昔をしるあるしなるらん
 四九 天の戸を明るはたてる春の色に霞出るや羽衣のそて
 五〇 年こえて十日あまりの二見かた春立浪の後そかすめる
 五一 家くに入る春をまつらめや夜ふかき庭の朝清めして
 五二 春や先たかまか原の神代にも土はしまらぬ海に立らん
 五三 玉そよる浪に霞をしきたへの袖しのうらの春の初風

三六 奈—松

三七 かな—哉

四六 らむ—らん

四八 なる—成

五四

さほ姫の春をふくめるいきのをや年にうちはへ霞いつらん

五五

百花も弥継に見ん今朝霞年ひらけ行色そこもれる

五六

水も木も春立庭の雪氷きくに浪なしみるに花あり

五七

のとかなる日影も風も春立といはぬにしるき杳の氣色哉

五八

水よりうちいつる浪の初尾花春立今日のまのゝ秋かせ

五九

影とめしみたらし川のをみの袖ふる年つもる春や立覧

六〇

限なき神代のむかし天地のひらけ初しそ春のはつはな

曉立春

六一

さ夜ふかく嶺にあつまる雲わかれ星のかす消明る年かな

六二

冬と春と今夜行合衣くの袖と見ゆるや霞そむらん

六三

くる春の光か年もあけ星を鳥のこゑさへうたふとそ聞

立春朝

六四

氷より春立わたる朝川のけふりや水のかすみなるらん

六五

うこきなき杳々の山とし高ねより春立のほる朝日影かな

六六

立春日

六七

立春天

六八

神代にや緑を空のはしめにて立くる春の色となりけん

六九

名にたかき天のは衣冬さえてけふや春日の影にあふらん

立春霞

七〇

山のはの今朝は見えぬや春立といふにもあまる霞なるらん

五五 弥継―弥継

五六 みる―見る

五八 秋―秋

六六 の―の

六九 十一 あふきみん今朝や霞も諸共に春たち^{*}のほる久かたの山
七〇 くもりなき御代の鏡か山鳥の尾上かすまぬ今朝の朝日は

立春風

七一 一 海山もあれにし四方の冬の空風おさまりて春や立覧
七二 御笠山春たつ色に出る日の光もなひく峯の姿かせ
七三 おき出て沓のこゑ聞はのとけきや風の心に春の立覧
七四 おさまれる国津よろつの神風にけさうちなひき春はきにけり
七五 十二 天の原春立雲の浪こえて風のかけたるしからみもなし
七六 敷嶋の道もろ共に今朝や立六種も春も風をはしめ^{*}に
七七 十三 吹かはり春たつ道の追風に旅なる冬や遠さかるらん
七八 吹あれし風おさまりて立春の山も時しる朝かすみかな

立春水

七九 四 尋来てたれくみそめん山の井を霞のつゝむ春のわか水

立春氷

八〇 一 影きよき岩まの水のひも鏡とけても春にむかふけふかな
八一 十三 川口をとちし氷も聲立て関もる浪に春やたつらん

山立春

八二 三 くる春にあふ坂なから白川の関の戸あくる山の雪かな

春

立春松

八三 古 今朝みれはたてつゝけたる門なみに杳原遠き都也けり

早春

八四 一 海士小舟初せ川浪うち出て氷そうかふ春のこもり江

八五 二 つもりこし雪のしら山うちかすみ冬のとまるゝ春はきにけり

八六 四 くる春は冬のかへりし跡しめて昔はわかやとゝ霞をそしく

八七 さくを待花の都にこし春は霞のうちやすみ家なるらん

八八 天の原あふけはたかく霞日も光ある世の春の色かな

八九 七 けふは又後の子日の墅へことに杳もかすみも引かさぬらん

九〇 古年の涙のつららとけしより袖行水のたゆる日もなし

九一 神のます山の南の宮柱春たちめくりかすむ空かな

九二 十 いもせ山春の霞の衣たに中にあらすは年もへたてし

九三 曇くる霞の下の雪こほりかたへ冬なる春の山川

九四 十三 雪のうちにたゝ年はかりくる春を待かね山はかすむともなし

九五 天津空春の霞もこほれるや打出る雲の浪たゝぬまで

九六 ましはれる神や染なす紅の塵にかすめる昔は春にして

九七 晴くもり春はくらせる日のうちにさえ（まじ）のとけみ影かはるなり*

九八 のとけしや霞の光さして行山より山の春の初かせ

九九 十 いかにして七十あまり七種を身につむ年の春にあふらん

一〇〇 よもの海に立月の名もむつまじと君はしら浪こゆる年かな
 一〇一 比はまた春の日なからなかくらて雪けにかすむ風そ寒けき
 一〇二 鳥のこゑ霞の色もいちしるし春となつけそ岑の黍風
 一〇三 かつきえし山の嵐も又さえて霞も雪も春のむらたち
 一〇四 風さえて雪はふれくと古年におもひくらへよ春はきにけり
 一〇五 春のきる衣をさむみ重ぬらん霞のひもとくあらし哉
 一〇六 春のきるよもの霞のうす衣今朝より夏のおもかけそ立

都早春

一〇七 九重や時にあへりと住人の心の花も春や来ぬらむ
 一〇八 白川の関の秋霧吹のほり宮こにかすむ春のはつかせ
 一〇九 さきいつる心の花の宮こ鳥とりさたまらぬ春の初風

一〇八 秋一殊

早春霞

一一〇 花やとき霞の衣梅かくに袖ふれそむる春は来にけり
 一一一 去年の三月たな引つれ帰しや今年の春に霞きぬらん
 一一二 朝あけの山のこなたに春のきてたてするすかたや霞なるらん
 一一三 色かへぬ霞や天のかく山に去年ほしかけし衣なるらむ
 一一四 春やきる織女もしらし朝明のうすき霞の天のはころも
 一一五 はるのきるしのふにすれる袖もなし限しられす舌はかすめとも
 一二六 しからきや外山の正木くる春の霞と共に綱手引なり

春

早春雪

二七 二 踏わけて春来にけりとたか里に太山(みやま)の雪の苔のむら消

二八 あさ衣かたへ寒けき山風に雪も霞も春の村きえ

二九 三 霜にさへ緑さかふる松かえに春あらはるゝ雪の村きえ

三〇 あら玉の春の光を降雪に敷嶋山はかすむともなし

三一 春風も春をよろこふしらへにて雪をめぐらす雲の袖哉

三二 けさそとふ冬の高ねにつもりしはふりて友まつ若年の雪

三三 八 冬の色の猶つれなきをもらさしと霞こめたる山の白雪

三四 十 春のきるみのし衣(マユ)廣くたつかすみにたまる山の白雪

雪中早春

三五 四 かねてより豊の年ある雪氷くる春あつきめくみをそしる

早春朝

三六 四 春日影水なき空のこほりをもとくや草木におつる朝露

早春鶯

三七 二 谷ふかみ古巢を冬になしはてゝ春の日かけにいつる鶯

三八 七 春きても太山の松の雪に鳴鶯さそへ壁への梅か枝

早春天

三九 十二 おも影そけふもかはらぬ天の原ふりにし年の春やたつらん

四〇 十三 久堅の天の岩戸をあけし杳も出る日影にしるき春かな

三二 春 松

三七 かけ 影

三八 梅か枝 鶯かえ

一三二 いつる日も光のとけき久かたの天の宮人春をしるらし

早春餘寒

一三三 山はまたかすまぬ雪も降かねて嵐のまへにこほる雲哉

一三四 をしなへてかすむや雪け大空をわたる春日の影の寒けさ

早春風

一三五 吹まゝに年そ明行久かたの天の岩戸の関の春かせ

早春水

一三六 二 ぐみ初て末をそおもふあら玉の春をむかふる宿の若水

一三七 三 年毎にあらぬ姿そあはれてふ老の影見よ春の若水

早春氷

一三八 十 紙屋川今朝うちとけて水そ行氷や神の心なるらん

一三九 初せ川氷なかれて岩ほうつこゑさへ鐘にたくふ春かな

山 早春

心孝一周忌追善續哥五十首中巻頭

一四〇 九 うしと見し春もめわたる鳥邊山もえし煙や霞きぬらん

早春山

一四一 四 瀧の上にいそく御舟の山かつらまほにかけてや春のきぬらん

一四二 都まで春や立らむ朝日影かゝれる西の山そかすまぬ

一四三 十 霞立春さへいまた旅にして衣や寒きむこの山かせ

一三五 おもふと思ふ

春

浦早春

一四三 三 ことうらの海士やはしらん此花の匂ふ難波の春の初を

早春海

一四四 十 時をうる空もひとつに春の色の青うなはらそいとゝかすめる

早春衣

一四五 三 春のきる衣霞の下風に山もしのふのおくそみたるゝ

初春

一四六 一 をしなへてかすめるよりも天の原すめるを春の色そのとけき

一四七 三 玉津嶋や春たつはまの真砂山つきせす遠くかすむ浪哉

一四八 四 君かへん千世の年のをくりかへし又はしになる春はきにけり

一四九 夜の程にかへりし冬の春ならは名あらためて年やきぬらん

一五〇 住吉のはまの真砂をみかく日も光春なる玉津嶋山

一五一 七 みとりそふ松も千世まで限なき霞そ春に色はちきれる

一五二 いはふなり老てもさらに七十は逢かたき春にあへるけふとて

一五三 立初し日かすのまゝにふる年のこゆれはやかて春そたけ行

一五四 十 山の名の千年の坂をけふ越て行すゑとをくかすむ春哉

一五五 大ひえやむかしの柚木こゑかすみいまも高ねに春風そふく

一五六 年こえてとへは五十日そ春とする待遠ならし初桜はな

一五七 くる春をやかてしめちか原の草もゆるみとりそ松にまされる